の図書は，この受入掛ではじめて京大生活のうぶ声をあげることになっている。それは京大の図書の管理方式が，全学一体の形をとっており，どの部局で購入された本も，どの研究所で寄贈を受けた本も，まず図書館の蔵書とされた上で，それぞれの任務に服するために散っていくからである。

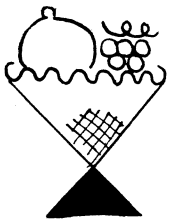
ここで一応京大の図書に関する数的な統計を見ていただこう。明治30年に京大が創立されて以来，昭和39年4月までに受入れられた本は，和書 1,216,475 冊，洋書 1,052,256 冊，合計 2,268,731 冊となっている。これは，日本の他の図書館と比べると，国立国会図書館，東京大学に次いで多いということになる。昭和38年度中には 69,184 冊が受入れられた。これは1年を通じて，日曜日でも祭日でも毎日 200 冊の本が受入れられたことになる。

では，受入掛とはどんな仕事をしている掛であろうか。一冊の本がどういう操作を経て京大に籍をおくことになるのか，その流れに従ってみてみよう。本屋の店頭から運ばれてくる場合，外国の港から船にのって運ばれてくる場合，あるいは，会社の社史とか，都道府県の地方史のように，直接送られてくる場合というようにいろいろあるが，本は法律で定められた書類とともに各部局から図書館の受入掛へ運ばれてくる。そこで入籍の日と，入籍順の受入番号とがあたえられる。

そしてすべての本は朱肉のついた大きな蔵書印と，受入番号印をタイトルページの裏に捺される。こうしてはじめてただの本が京大の本に生れかわる。京大の蔵書印を捺された本は，その服すべき任地に従って同じ行き先の仲間とともにボテ箱につめこまれ，トラックの荷台に乗せられ，先生方や学生諸君の待っている学部，研究所へ送り出されるわけである。

こう書いてくると，そんなに大した仕事ではないかのように感じられるだろうが，なかなかどうして，受入掛は，会計検査の対象にも含まれるから，司書の多い図書館の中で，会計掛と同じようにソロバンや計算機が必要であるし，それに加えて，図書を見る司書としての目も要求される。さらにトラックの上に乗って配達もするので，筋肉も太くなければつとまらない。昔，受入掛にいた人で，蔵書印の捺印に情熱をこめて，実に美しく立派な仕事をされた人があった。いつも羽織はかまのいでたちで仕事にのぞみ上下のつり合い，左右の間隔，印肉の濃淡と，一分の隙もない蔵書印であったという。今でも，その人の仕事は書庫に並ぶ多くの本のタイトルページをかざっている。

京大の中で本を読まれる方は，どの本にも，受入掛員の汗が流れていることを感じとっていただきたいものである。



—あとがき—

文化の月に第2号をお届けできることを大変うれしく思います。創刊号に見たほどの生みの苦労はなかったというものの，教官，職員，学生諸君と広範囲にわたる読者諸兄姉を対象としているだけに，編集員一同懸命に頑張っております。何分にも発行部数に制限がありますので，お読みになった館報は回覧していただき，投稿やご批判をいただければ編集員としては何よりの喜びです。

京都大学附属図書館報「**静修**」Vol. 1, No. 2（通巻2号）1964年11月16日発行・発行人岩猿敏生
京都大学附属図書館発行・京都市左京区吉田本町・電代表 77—8111（内線）150—159